

令和5年第1回尾張旭市いじめ問題専門委員会 議事要旨

1 開催日時

令和5年8月7日（月）

開会 午後2時

閉会 午後3時30分

2 開催場所

尾張旭市役所 南庁舎3階 講堂2

3 出席委員

金城学院大学教授

川瀬 正裕

愛知県弁護士会弁護士

長谷川 雄一

瀬戸旭医師会医師

安藤 郁子

尾張旭市社会福祉協議会

星原 淳一

4 欠席委員

臨床心理士

上田 千鶴

5 傍聴者数

1人

6 出席した事務局職員

尾張旭市教育委員会教育長

河村 晋

尾張旭市教育委員会教育部長

山下 昭彦

学校教育課管理指導主事

伊藤 和由

学校教育課長

田中 健一

学校教育課指導主事

岩下 徹

7 議題等

(1) 令和4年度「いじめ実態調査」の調査結果、いじめの認知件数について

(2) SNSを使ったいじめ・悩み相談について

8 会議の要旨

指導主事	<p>ただ今から、令和5年度第1回尾張旭市いじめ問題専門委員会を開催いたします。</p> <p>本日の会議は、4人出席であり、尾張旭市いじめ問題対策連絡協議会等条例第10条第2項の定数を満たしておりますので、有効に成立しております。</p> <p>また、本委員会は教育委員会の附属機関であり、附属機関等の基本的取扱いに関する要綱第6条各号の規定により、原則的</p>
------	---

	<p>に会議を公開するとともに、会議録を作成します。</p> <p>傍聴席は、事務局の席の後ろに設けてありまして、現在、傍聴者は1名です。</p> <p>本日は、昨年度末の委員改選後、最初の会議ですので、後ほど委員長を決めていただきますが、それまでの進行を、指導主事の岩下が務めさせていただきますのでよろしくお願い致します。</p> <p>それでは、開会にあたり、尾張旭市教育委員会 教育長の河村より御挨拶させていただきます。</p>
教育長	<あいさつ>
指導主事	<p>続きまして、いじめ問題専門委員会の委員の皆様を私から御紹介させていただきます。</p> <p>金城学院大学 教授 川瀬 正裕 (かわせ まさひろ) 様 愛知県弁護士会弁護士 長谷川 雄一 (はせがわ ゆういち) 様 瀬戸旭医師会 医師 安藤 郁子 (あんどう いくこ) 様 尾張旭市社会福祉協議会 星原 淳一 (ほしはら じゅんいち) 様 本日欠席をしておりますが、 臨床心理士 上田 千鶴 (うえだ ちづる) 様も 含め5名の皆様です。</p> <p>事務局につきましては、 尾張旭市教育委員会 教育長 河村 晋 教育部長 山下 昭彦 管理指導主事 伊藤 和由 学校教育課 課長 田中 健一 学校教育課 指導主事 岩下 徹 でございます。よろしくお願い致します。</p>
指導主事	<p>それでは委員長及び職務代理の選出を行います。</p> <p>尾張旭市いじめ問題対策連絡協議会等条例第9条第1項で、委員長の選出は、委員の互選によって定めると規定されております。</p> <p>どなたかよろしくお願い致します。</p>
安藤委員	<p>子どもの心理面について造詣の深い、金城学院大学 川瀬先生が適任であり、推薦したいと思っております。</p>

指導主事	<p>ただいま委員長に川瀬先生の推薦がございましたが、他にはございませんか。</p> <p>特に御意見がございませんので、皆様の拍手をもちまして委員長を川瀬先生にお願いしたいと思います。(拍手)</p> <p>それでは、川瀬先生、委員長席にお願いします。</p> <p>続きまして、職務代理者を決めさせていただきたいと思えます。</p> <p>職務代理者につきましては、尾張旭市いじめ問題対策連絡協議会等条例第9条第3項で、あらかじめその指定する委員が職務を代理することになっております。委員長より指名をお願いします。</p>
川瀬委員長	尾張旭市社会福祉協議会の星原さんを職務代理に指名します。
指導主事	<p>ありがとうございました。</p> <p>続きまして、川瀬委員長に御挨拶させていただきたいと思えます。</p>
川瀬委員長	<あいさつ>
指導主事	<p>ありがとうございました。</p> <p>それでは、ここからの会の進行につきましては、川瀬委員長にお願いいたします。</p>
川瀬委員長	<p>それでは、以後の進行を次第に従いまして進めていきます。</p> <p>議題「(1) 令和4年度「いじめ実態調査」の調査結果、いじめの認知件数について」、事務局から説明をお願いします。</p>
指導主事	<p>(事務局説明)</p> <p>資料1を御覧ください。令和4年度「いじめ実態調査」の調査結果です。(4)調査結果概要のはじめにある「学校は楽しいですか」との問いに対し、85%を超える児童生徒が「楽しい」「まあまあ楽しい」と肯定的な回答をしておりますが、1割の児童生徒は否定的な回答となっております。この傾向は、今年度に限ったものではなく、毎年同じような結果となっております。否定的に思った原因が、いじめなのか、学習なのか、何かそれ以外に要因があるのかを把握していくためにも、子どもたちの表情や様子などをしっかり観察し、教員が子どもたちのちょっとした変化に気付く感性を磨くとともに、子どもたちに対する日々の声かけを大切にしていきたいと考えています。</p> <p>次に「今の学年でいじめられたことがありますか」については、</p>

例えば中学3年生が、2年生や1年生の時の結果と比較して、3年間の推移で見ると、減少をしていることが分かるように、学年・年代が上がるにつれて「いじめられた」と認識する児童生徒は減少しています。これは、「いじめ」の捉え方が年代によって違うことが影響していると考えられますが、どの年代・学年においても、「いじめられた」と感じている児童生徒がいることを念頭に置き、しっかりと未然防止・対策を行っていく必要があります。

「いじめられてどうしましたか」との問いに対し、「がまんした」と答えた割合が小学校でも中学校でも一番高くなっていることは、大変危惧するところです。家族や教員、友だちはもちろん、スクールカウンセラーや心の教室相談員、電話相談など、関係の相談機関を周知し、児童生徒が一人で抱え込まずにどこにでも、誰にでも相談できる雰囲気・環境を整えていく必要があると考えます。

次のページをご覧ください。

また、「いじめはどうなりましたか」との問いに対し、「少しなくなった」「今も続いている」と回答した割合は、小学校・中学校ともに60%を超えております。これは大変憂慮すべきことであり、改善していかななくてはいけない数値だと考えております。担任だけでなく複数の目で継続的に子どもたちの様子について観察し、情報共有を図ること、全教職員で継続的に再発防止に努めていく必要があると考えています。

また、本委員会でご意見をいただき、設定した「今の学年でいじめをしてしまったことはありますか」という問いに対し、小学校では9.8%、中学校では2.2%であり、加害者側の自覚・認識が低いことが予想されます。加害側はいじめと認識していない言動が、被害側にとっては、「いじめられている」と感じさせていることがわかります。児童生徒には、自分自身の何気なく発する言葉や何気ない行為が、相手を苦しめてしまうこともあることを伝え、自分自身の言動には責任があることを自覚させるような指導が大切になってくると考えます。

学校はアンケート結果を受け、児童生徒に対し教育相談を行い、いじめの解消に取り組んでいます。アンケートだけでなく、普段の観察やいじめの積極的認知により早期対応ができるようにすることが求められています。加えて、未然防止の取り組

	<p>みにより発生件数を減らしていくことも進めていかなければなりません。</p> <p>続きまして資料2をご覧ください。令和4年度のいじめの認知件数について説明をさせていただきます。</p> <p>この件数は、学校がアンケートや相談などでいじめが分かり対応した、すべての事案について報告された総数となっています。</p> <p>昨年度の調査結果と比較すると、小学校においては認知件数が増加しております。一方、中学校においては、小学校とは逆に認知件数が減少しております。</p> <p>小学校においては、いじめの件数が増えたわけではなく、校長会議や市のいじめ不登校対策委員会など、様々な機会を通して、いじめの定義を確認し、より積極的に認知し早期対応をしていた結果だと考えられます。一方、中学校においては、先ほどの「いじめをされてどうしたか」の回答の「がまんした割合」が63.1%という高い数字を照らし合わせると、自らいじめを認知してSOSを出せていないことが考えられます。</p> <p>いじめ問題連絡協議会の委員からは、「いじめの態様の中で、「パソコンや携帯電話などで、誹謗・中傷やいやなことをされる」という区分について、中学校で3件となっているのは、顕在化していないいじめがあるのではないか」といった御意見もいただきました。</p> <p>SNSのトラブルが少ないという意味ではなく、生徒自身も含めて「いじめ」として捉えていない結果であると考えられます。SNSに関するトラブルは、表面化しにくい事案であることから、潜在的には、もっと多くのトラブルがあることも考えられます。今一度、いじめの定義について確認し、積極的ないじめ認知と適切な対応をしていくとともに、いじめに対する感覚を磨いていくことが大切だと思います。</p> <p>以上議題について説明を終わります。</p>
川瀬委員長	<p>ただいまの令和4年度の「いじめ実態調査」の調査結果、いじめの認知件数の説明について、御意見をいただきたいと思えます。</p>

川瀬委員長	<p>調査の時にいじめという言葉で聞いていて、それは、回答する子どもたちの理解のままでということですね。先ほどの説明にあったように、これをいじめと言うのか、いじめと言わないのかというところは、ここでは吟味していかなければいけないと思います。</p>
指導主事	<p>日頃からいじめというのはどういうものを子どもたちには「された方が嫌だと思ったら、それがいじめになってくる。」と周知しています。しかし、子どもの中にはまだそれが浸透していないところもあるかもしれません。ちょっとした嫌悪感もいじめられたと認識する子もいます。子どもたちが判断するの物差しが違うところもあります。</p>
川瀬委員長	<p>行為を受けている子どもがいて、それを辛いと感じるか、嫌だとか辛いとか感じないかでいじめであるかどうかを認識します。先ほども話したんですけれども最近の子どもたちが嫌なのか、嫌じゃないのかというのを感じる力が非常に曖昧になってきているように思います。行為をされた子どもにどう思うのと言われてもわからないと答える場合もあります。嫌だというのは、なかなか言えないというか、こちらから押し付けることはできなません。どうですか聞いてもなかなか子どもはわからない。非常に曖昧な感覚をもっている気がしますが、いかがでしょうか。</p>
安藤委員	<p>これはある事例ですが、私の外来に来ている子は、やっぱり発達の課題がある子が多く、自分の気持ちとかその状況をうまく人に説明ができないし、それっていじめと違うのという話もあります。この間、先生がいじめに対して子どもたちに徹底的に教育してくれているんだというのを実感し、すごく救われた気分になりました。5年生の女の子ですけれども、境界領域中でちょっとADHD的なところがあるので、下手するとターゲットになりやすい子なんです。小さい時から仲の良かった女の子にいろいろきついことを言われている。クラスメイトの女の子がその様を見て、先生に「私は心が苦しい」と言って、その先生が介入してくれて救われたというケースです。その担任の先生は、クラス全体に対して話をしてくれて、すごくいい方向に向かったようです。お母さんが涙ぐみながら言ってくれて、すごく感動した事例がです。</p> <p>先生方がどのぐらいいじめに対して気がついたかとか、介入</p>

	<p>したかという先生方に向けてのアンケートを行い、数値を出していただけたらと先生のアナテナが鋭くなるのではないかと感じます。特に、発達課題があつて本人から発信しにくい、もしくはターゲットになりやすい子たちというのは、親御さんは気をつけてみている場合が多いです。一方、親御さんも気がつきにくい方も結構いて、クラスに1割弱はそういう子がいる世の中なので、先生のアナテナを鋭くするというのも、今すごく必要なことなのかなと思っています。</p>
川瀬委員長	<p>ありがとうございます。先生たちは「これぐらいなら見守っていいのかな」や「これはもう介入した方がいいな」と判断すると思います。事務局の先生方に聞いてしまうのですが、どういうふうにするでしょうか。</p>
指導主事	<p>小学校低学年が先生に「何かされた」とよく言ってくるので、その度にやはり本人からの話はしっかり聞きます。これは基本的なスタンスです。ただ、高学年もしくは中学校になるとなかなか自らSOSを出すところが減ってきています。恥ずかしいのか怖いのか判断はできませんが、そういうところは子どもたちの表情とか行動を見てちょっと気になったら、こちらから声をかけていきます。ただ、何かあつたときには必ず話を本人から聞くことは小学校、中学校も含めて変わらないスタンスであると思います。</p>
安藤委員	<p>本人から聞くのも大事ですけど、やっぱり今回の例みたいに、周辺の子どもたちからの情報収集も必要だと思います。「あの子、ちょっとやられてるんじゃないの」というようなことを発信してくれる子が絶対にいると思います。そういうアナテナも必要なのかなと。本人がSOSを出しやすい関係を作るのも大事だけれども、他の子もそういうことをちゃんと表明しやすい空気を作っておくということも大事ということになると思います。その担任の先生はやっぱりそういうふうになんでも報告してくださいというようなクラス運営されている方だつたと思っています。同級生がその子のことを心配して相談してくれたという関係性ができていたと思います。それは、とてもいいことだと感じます。</p>
教育長	<p>いじめの認知は誰がしているかということ、子どもじゃないです。本来は大人であり先生自身がこれをいじめだという形で認知をすることから始まっていますが、このアンケート自体のや</p>

	<p>り方が子どもからの告白というか、子どもがいじめられていると言ったものだけが数字に上がっています。先ほど安藤先生が言われたように、先生がいじめって認知しなかったら、これ一体どうなるんですかと、現実にはいじめがたくさん起きていながら、気がついていないということもあり得ます。</p> <p>周りの方をどれだけ活用して自分のアンテナとしてそれを発見できるかという力が、いじめ対策に非常に大きなものになってくるのではないかと思います。もともといじめられて、その子どもがいじめられましたなんて簡単に言えることであれば、解決方法も割と簡単だと思います。しかし、言えないところに隠れた部分があって、それを発見するという力がやはり、いじめの解決には大きな力になると思います。先ほど安藤先生が言われたような、先生方が「どれだけいじめというものを自分たちで見ているんですか」というのが1つの鍵になると思いましたが、ぜひそういうのも実施していきたいなと思います。</p>
川瀬委員長	<p>事実をまず大事に確認をして、それをどう捉えているのかは、いじめの方法に対していろいろとあると思いますが、いじめ事案みたいなのは、弁護士としてどんなふうに構築されるのでしょうか。</p>
長谷川委員	<p>まず事実を大事に確認しないといけないものですから、いじめがあったかどうか、事実があったかないかというところがすごく重要になってきます。事実をどう確認するのかというところがすごくポイントになるのかなと思っています。わかりやすいのはLINEとかで言われたとかだと、LINEを見ていけばこういうやりとりがあったというのでわかります。</p> <p>しかし、何か言われたとか、こういうことをされたとかいう形に残らないものをいじめとして取り上げるかどうかというところがすごく難しいと思います。先ほど安藤先生がおっしゃったように当該の子だけじゃなくて、周りの子どもたちの証言というか、そういうことを見たとか聞いたとかということもすごく大事になってきますので、この事実認定というところがすごくいじめについては大切と思っています。</p> <p>いじめ調査もお手伝いしたことがありますけど、やはりそういう事実があったかどうかという点がすごくポイントになってきますので、いろんな証拠を取り上げていって、そこから事実を認定していった上で、これはいじめと言えるのかどうかという</p>

	<p>評価の問題になっていくので、そういった事実を確認するのがすごく難しいと思います。</p>
川瀬委員長	<p>今の話ではないですが、みんなに睨まれている気がすると言われちゃうと、「それは違う。そんなことないよね。」という面と、やっぱりそういう空気を確かにクラスがもっているのかな、というふうになかなか見分けにくい状況です。</p> <p>本人も非常に被害感が強くなっているお子さんにとっては事実としてはそれはないけれども、そういうふう感じてしまって苦しんでいるということなのか、それともやっぱりそういうものがあつたようなことなのか、なかなかそれは難しいです。</p> <p>私たちとしてはいじめがあるのにピックアップできないというミスの部分と、いじめだと言ってきているけれども、それは本当のそういう関係ではないという部分があります。その両方があつて、できるだけ両者ともいじめにカウントしたほうが、無難な方へいくのかな、というふうに思う反面、いじめだと言われたらいじめていると言われた子もやっぱりそういう評価を受けるわけですから、そこも気をつけなければいけないと思います。</p>
星原委員	<p>今のお話を聞いていますと、大人の世界も同じだなと思います。過去には、いじめたという人の名前を挙げて辞めていかれる人もいました。そのいじめをしたと名前が挙がった人々にヒアリングをします。しかし、いじめた意識など全くないんです。では、何がそのいじめの原因だったかと言われるものって何だったかという、それはちょっと考え過ぎなんじゃないかな、あまりにも被害者意識がちょっと強すぎるんじゃないのかな、というようなケースだったりします。これを見抜くのは相当難しいと思います。実際に辞められた方は、心療内科に通われて診断を出されて辞められましたが、そういったケースっていじめた側の評価の方もすごく微妙です。実際そんなつもりじゃなくても、そういうふうな目で見られてしまう人になってしまう可能性もあります。あと私は市内のスポーツクラブでスポーツを教えますけど、やっぱりその20人くらいの小学生の中でも、あの子にいじめられたとか悪口言われたとかがやはりあります。そうすると、自分はよく話してくれたねって言います。では、どうしたいのって聞くと一緒にやりたくないからって言うので、その子の希望を聞いてなるべくそうなるようにします、その後は、〇〇ちゃんからこういう話もあつたので、直接言うわけではなく</p>

	<p>て悪口言ったり、そういうことするとあまりよくないよねっていう話を投げかけると言われたら嫌なことって誰でもあるからやっぱりやめた方がいいよねって話をするとなんとなくやめてくれる。</p> <p>やはり注意や指摘の仕方によって、角が立つようなものがあるので、すごく先生方もそういうところで悩まれるのではないのでしょうか。</p>
川瀬委員長	<p>私もそういう発達の難しさを抱えたお子さんのところへお邪魔してクラスを見たことがあります。ある子たちが揉めたようで、一人が泣き出して部屋を出てしまった。先生が残った相手の子に何があったんだって言うとその子は泣かずに理由を言っていました。そこから泣いた方がいい子になっちゃう。子どもたちの中にはそういう認識もある。泣いてしまった子はどっちかっていうと守られるべき人であって、その相手になった方がとがめられる人になってしまう。すごくそういう理不尽さを感じている場面がいくつか子どもたちの中でもあるのかなって思わざるを得ない時がありました。</p> <p>本当に難しいです。先ほどの安藤先生のご紹介いただいたケースだとそういうことはあったけど、それをうまく解決にもっていったことは、すごくいいです。すごく本人がいないところでみんなと話をした方がいいのか、どういう形でこのいじめを受ける人に対して個人行為ではなくてクラス全体の教育としてどういう風にしたらいいんだろうかっていうのが話し合われた結果です。</p>
安藤委員	<p>先ほどお話しあったような大人の世界でいうパワハラモラハラのようなことが子どもの世界でもあって、泣いた者が勝ちみたいところとか、声の大きい子が勝つとか注目されるとか。そういうのはどうしてもクラスにあるので、そこをどうやって見抜くとか、どういう風に介入していくかって先生はものすごくスキルがいるんじゃないかって思います。</p> <p>先生がうまく介入してないから、または先生がちょっとうまく対応してないから起きた事例は、結構あるという話が以前の本会議で出ました。そうやって考えていくと、やはり先生方は一生懸命いじめに対して向き合ってくれてるんだと感じました。ただ、やはり「このいじめはその後どうなりましたか」の質問に対して「少し良くなった」「今も続いている」と答えた生徒が多</p>

	<p>いところを見ると、やはりまだうまく介入されてないとか気づかれてないとかあるとも感じます。</p> <p>小学校の4～6年生あたりから子どもが特に強がる傾向があります。「大丈夫なの」って聞くと「大丈夫」って答えがあるので、全然大丈夫じゃないでしょうと思ってしまいます。声かけするんですけど、大丈夫って聞くのは全く無意味です。子どもは、「大丈夫」って答えます。子どもは自分の中でまだ混乱してる中、「大丈夫か」と聞かれても「大丈夫、大丈夫」と言います。今そこであんまり聞かれても自分の気持ちはまとまってないし、うまく言えないし、大丈夫。あまり親しくない人から道端で最近どう?って言われても、自分にとって私の最近は何を説明したらいいのでしょうか?みたいなやり取りをするのと同じです。</p>
川瀬委員長	<p>やっぱり周りに心配かけたくないとかですよね。子どもなりに抱えてるものは、いろんなケースがあります。こういったことをすると、家でお母さんにいろいろと叱られるとか、お父さんにいろいろと言われるのではないかと、そういうことも出てくるからなかったことにしたい。ほっといてくれっていうのは子どもなりにあるかなって思います。そういう、いろいろと難しいところをどうやって拾い上げていけるか、ということが大切です。</p> <p>あと担任の先生が目線に温度差があると感じます。この子はそういう子だみたいな感じで見ている先生もいるのではないのでしょうか。立場の違う複数の先生方に一人の子をどう見るかというの必要な、というのと、先ほど先生のメンタルという話もありましたけど、あんまり担任の先生一人に役割を課すのは大変です。</p> <p>しかし、その割にはあんまりスクールカウンセラーとかいろんなところが利用されていないのが、残念です。もうちょっといろいろな人がいろんな子を見ているという体制があるとよいと思います。</p> <p>スクールカウンセラーは週に1日の6時間勤務の中で、すべての枠に相談が入っていることが多いのではないのでしょうか。そのため、先生方とやり取りする時間も実はあまり取れていない。そういう実態があるので、気軽にいつでも話に来てねって言うんだけど、いつ空いているのでしょうかという状況になって</p>

	<p>いる。尾張旭市は心の教室相談員がスクールカウンセラーとは別にやっただいてるので、その方々の力も使っただきたいです。</p> <p>子どもを見てるとにこにこしてるからあれは遊んでるとみられるケースやじゃれているんだって見えるけれども、実はそうではないみたいなケースがあります。子どもたちはどうSOSを出していいかわからない状況なのでしょう。</p>
長谷川委員	<p>いじめって言う言葉にみんなナーバスになっている気はします。子どもがいじめって言うと、大人がすごく騒いでしまうからなかなか事実が言えないっていうのがあると思います。周りの人が必要以上に騒いでしまうと子どもとしてはすごく責任を感じてしまい、自分のせいで大変なことになっていると感じてしまうこともあるのかなと思います。相談でもありますが、親の方がすごく一生懸命というか、感情的になっているというのがあり、子どもと個別に話したいんですけど、保護者の方が感情的になり、子どもがますます言えないというふうになっているように感じます。親の前でもあまり本音が出せないというのもあるのかなと思うので、いじめというか、子どもからの本当の声を集約してあげるというか、それを捉えることがすごく難しいな、という感じがします。</p>
川瀬委員長	<p>子どもたちがこういうのいじめだよねという話は、学期ごとにされるんですか。</p>
指導主事	<p>学期1回とかではなくて定期的にアンケートはしています。子どもたちには、アンケートを取る前にいじめの定義を意識させています。説明を聞いて、子どもの中で何か意識が変わったようなことがあった場合、そういう子どもたちの本音をまたヒントとして拾ってけるとよいと考えています。</p>
星原委員	<p>アンケートの中で「我慢した」という数値が多いです。これはショックな数字ですが、子どもたちの声を拾うこともできないという意味ではないと思います。「我慢した」の中には、もう受け流したことを我慢したと言ったり、嫌だったけど他に適切な選択肢がなくて選んだりしたという子もいると思います、こういう思いも多分我慢した中には入っているんじゃないでしょうか。我慢したという定義って何ですかという話になりますが、我慢したじゃなくて、相手にしなかったからというのも入っているのではないかと思います。</p>

安藤委員	聞き流したり無視したり、別にいいと思えるのも大切なスキルです。このようなスキルを育ててあげたいなという気持ちはあります。
川瀬委員長	<p>実態調査の今回の報告から、あえてまとめきるということはありませんが、いかにして気づくか、いかに子ども自身も気づくか、そしてそれを大人もいかにして気づくかという、そこをどうしていったらいいか、というのが課題だというのは共通にして、共有できると思いました。</p> <p>それでは、次の SOS ボタンの話もちょっと通じるところがあると思いますので、一旦ここでこの話題から離れて、よろしいでしょうか。</p> <p>議題の 2 の方で SOS ボタンを使ってのいじめ相談について事務局の方からご説明をお願いします。</p>
指導主事	<p>議題の(2)「SOS ボタン」についてです。使い方は、子どもたちがなかなか誰かに直接相談できない困りごとを、配布されているタブレットにボタンがありますので、そのボタンを押してアンケート形式で悩んでいることを言う、という形になります。資料の方にも新聞の記事を載せておりましたが、全国的にこのようなアンケート形式で SOS を出す流れがあります。本市でもこれに近い形で取り入れていこうということで、昨年度末からスタートしたわけです。</p> <p>今年の 1 月から 3 月のいわゆる 3 学期間、試験運用をしておりました。そして、4 月からスタートです。7 月末の時点で 8 件です。その内訳は小学校 2 件、中学校 6 件です。</p> <p>もちろんこれは匿名性もありますので、名前を書いている子もいれば何も書いていないという子もおります。誰かに相談したいときはこの「SOS ボタン」を活用する子も少し出てきているというところがありますし、これを受けて学校に情報提供をしていき、そして誰かに話を聞いてもらうというような流れになっております。</p> <p>これは 1 つの新たな方法だと思いますので、これを活用しながら、子どもが何か SOS を発信できる場作りも取り組んでいきたいと思っております。以上です。</p>
川瀬委員長	質問をさせていただきます。システムとして SOS が出てくると教育委員会のパソコンでみられるという流れですか。
指導主事	その通りです。情報が来たら、該当の学校に情報提供をしてい

	きます。しかし、学校名とか学年とかが書いてあれば、具体的な情報提供ができます。しかし、匿名の場合は、内容から該当する学校を推察し、情報提供をしていきます。
川瀬委員長	情報は教育委員会のどなたのパソコンに来るのでしょうか。指導主事でしょうか。また、時々チェックされますか?アラームが鳴るのでしょうか?
指導主事	指導主事が定期的に確認をしています。アラームが鳴るような仕組みではありません。
安藤委員	確認ですが、子どもたちが1台ずつタブレットを配布されますけど、これは家に持って帰ってますか。聞くところによると中学は、持って帰ってはいけないっていうふうになってるみたいです。持って帰ると自分でYouTubeを見てしまったりする子が多いようですので、持ち帰りができないのでしょうか。学校に置いてくというところもありますか。
管理指導主事	持って帰っていいものです。ただし、個人の判断ではなく、課題が出た時とか自宅学習がある時は持って帰るという体制です。使いたい子が自分の判断で今日持って帰るということはないと把握しております。市で統一して、全員が毎日、学校まで持ってきて学校で使って、そのまま自宅へ持って帰るということではありません。
安藤委員	基本は置いてくということですね。すると、子どもにとって学校でこういうことって書きづらいと思います。
指導主事	そうですね。家に帰ってから書くのならば、いろいろ整理しながら書けるかもしれないです。毎日持って帰らず、持って帰った日に書いてるのが現状です。 具体的に個人名を挙げて、何かされて嫌な思いをしたという内容を書いてあることはほとんどありません。「今、つまらない」とか、「生きていても楽しくない」というような短文でのつぶやきが多いです。自分を責めるというか、満たされない気持ちを出している傾向が強いと感じます。
川瀬委員長	ツールがあるというのはすごく良いので、いじめ対策の1つのヒントにはなっていると思います。タブレットは、教室の前の方に充電するために入っていると思います。各生徒のパスワードはもちろん違いますが、違う子のタブレットを出して、中身を勝手にみて、「お前こんなこと書いているのか」というよう

	<p>な話が出ることはないのでしょうか。人のデータを勝手に開いて触るってことがないですか。</p>
教育長	<p>パスワードは、以前はすごく簡単なものでしたが、そういったことが起こり得るということで、パスワードをもう少しわかりにくく、再編成して子どもたちに渡しています。</p> <p>今回のタブレットの SOS ボタンというのは今までは書面とか言葉でしか表せなかったですが、どこかで何でもいから少しでも子どもたちに発信できる場所ということで設定しました。以前は例えば 24 時間電話で対応できるようなという話も事務局の中でしておりましたがやはり、全てを受け入れるとなると難しい面があり、見送った経緯があります。しかしながら、子どもたちが発信できる環境を優先してということで、これを始めました。今言われましたように、いつでもどこでも実施する環境ができるかというところが 1 つの大きな課題にはなってくると思います。</p> <p>タブレットをいつでも勝手に持って帰りなさいというわけではなく、基本的には持って帰れますが、学校の詳細を得た中での持ち帰りしか今のところできていないです。家に持ち帰ってよいというときだけが、唯一自分の時間になり得るということで、その辺は改良していく余地は十分にあると思います。</p>
川瀬委員長	<p>本格運用時期は令和 5 年 4 月から運用とありましたが、保護者からこんなレスポンスがありましたというのは何かありましたか。</p>
指導主事	<p>保護者から意見というのは具体的にはないですが、子どもにはボタンがあるということをちゃんと周知しています。</p>
安藤委員	<p>この QR コードから、普通に保護者が読み取り、そこに書き込むということは可能ですか。</p>
指導主事	<p>QR コードからは、フォーマットは見ることはできますが、書き込みは、子どもタブレットから行うシステムです。</p>
川瀬委員長	<p>話が別になりますが、全国の自殺予防の夜間の電話相談が月曜日から金曜日の夜 6 時くらいから 10 時くらいまで開いていますが、3 人ずつ担当として詰めています。もちろん本当に緊急でかけてこられる方もいらっしゃいますが、話がしたいときに電話相談を利用する傾向があります。必ずしも今こういうことで本当に死にたいというような話をされるのではなく、普通の世間話的な部分と会社の様子とかずっと喋られてそれで落ち着か</p>

	<p>れるというケースもあります。やっぱり誰かと話したい、誰かの声が聞きたいっていう。そういう幅広い受付になっています。SOS ボタンだけでもそこから少し広がり、そういう話の中には、こんな悩みだって、取るに至らなくてかえって馬鹿にされてるんじゃないかとか思ってる子も、やっぱり誰かの声を聞いて安心したいと思います。きっかけのボタンみたいな。受ける側がそういうことを想定して緊急性はないよねっていう判断だけではなくて、ボタンを押してきたのであれば、やはりそれを受け入れてくるっていう認識を共有していただいたほうがいいのかなと思いました。</p> <p>スクールカウンセラーの話も、カウンセリングルームの実態はというと、相談で来る子ばかりではなく、そこにはぬいぐるみが置いてあったり、将棋があったり、オセロがあったりします。大人から見ると、何でそこに来るのかな、友達と遊べばいいじゃんって思いますが、やはりそうではなくて、何かそういう大人のそばにいたいってような思いのある子たちがいて、それぞれの利用の仕方をしてる。</p> <p>子たちがいるっていうのを考えると、そういう思いも拾っていけるといろいろなつながりができてくるのかなと思います。</p>
長谷川委員	<p>SOS ボタンの仕組みはなんか法テラスみたいな感じがします。LINE 相談を導入してる弁護士会がコロナが広がる直前ぐらいにやっているとところがあったので、愛知県の弁護士会でも導入できないかと検討したところがありましたが、見送った経緯があります。他の弁護士会の方にお話を聞きましたが、マンパワーが大変で、さっきチラッと話しましたが、LINE だとやりやすいけど、子どもからのメッセージに返さないといけなくなり、それを担当の3人で3時間組んでやってるけど、大変だなと思いました。でも、すごくやりがいもあるとおっしゃってましたし、子どもと直接つながれるすごくいいツールとおっしゃってました。実際に導入はしたいなとは思っていますが、やはり他の弁護士会では、夜の7時から9時の間と区切って、夜とかに相談することが多いとは聞いています。お昼は学校に行ったり、部活動をしたりしていろいろ忙しいので。落ち着いた時間にやはり、子どもたちはちょっと思うことがあって誰かに相談したいなと思ってそういうメッセージを投げるといことは聞いたので、そうなる夜間に対応できるというのもすごくいいんだろうなと</p>

	<p>は思います。ただ、それをシステムとして整備するとかなり大変です。やりたいなと思う半分でなかなか技術の面も難しいところがあり、個人的にはすごく心苦しいなと思います。</p> <p>法務局さんでもやってらっしゃいます。実はその見学に行っってちょっと話を聞いてみましたが、やっぱり法務局なので、平日の朝8時から夕方5時までで、平日以外の土日とか夜間は受付ができなくて週明けとかにメッセージを返すというのはありません。しかし、ほとんど返答がないとはおっしゃっていました。</p> <p>うまく支えられたケースというか、救えたケースというのはなかなか記録に残らないので、どれくらいそれができているのかというのは、行う側のモチベーションにもつながりにくいかもしれないと思います。</p>
川瀬委員長	SOS ボタンを実施してみて、何か大変な部分とか難しい部分とかあるのでしょうか。
指導主事	やはり、話すみたいに長文で言ってくるというのは正直ありません。ポツリ、ポツリと何かメッセージが来ます。大きなことではないですが、見てほしいとか、そういうサインなのかなというのは感じております。学校に連絡をして学校からも何気なく声をかけてもらうとか、それだけでもすごく意味のあるひとつのきっかけになるのかなとは感じております。この数が多いのか、少ないのかまだ分かりません。多ければいいというわけではないと思っております。ただ、必要としている子どもがいるというのは分かります。
川瀬委員長	そういう丁寧な対応といいますか、ちょっと声をかけてみるというだけでも大人に対する信頼感とか見守られている感とかというところも感じて、子どもが発信しやすいという今の一番の根本の解決にはなると思いますよね。先生なり関係する大人たちにちょっと声をかけてもらうというのはすごく意味のある感じだと思います。やっぱりニーズがあったということですね。
安藤委員	<p>できれば夜の9時か10時くらいまではちゃんとそういうのを対応してほしいです。大体子どもを外来で見ている、やはり1日のいろんなことが終わって、就寝という時間くらいに本当に心がつらくなり、夜行が出るケースがあります。</p> <p>いろいろなことを起こしたりするので、やっぱりそのくらいの時間が人間の心理や生理的に一番不安になる時間なのかなと</p>

	<p>いうふうに思います。できるだけ夜遅くまで対応できるというふうに思っています。</p> <p>変な話ですけど、子育て中のお母さんなんかも、やはり昼間ちょっと子どもがちょっと体調悪いなと思いつつ、でも病院にまだ行くことじゃないかなと思うのです。しかし、夜の9時10時くらいになると不安が募ってきて、救急外来に来る方が結構います。どうして昼に来てくれないのかなって思いますが、やっぱり夜が暗くなってきて、心の不安が大きくなってきて、いてもたってもいられなくて子どもを病院に連れてくるという時間帯なのかなと思っています。子どももきっとそういう不安が強くなる時間帯なのかなと思っています。</p>
川瀬委員長	<p>学校へこの情報を提供して、その後、この8件はどんなふうになりましたか。</p>
指導主事	<p>学校からは声をかけて対応を依頼しているところです。いじめがあったわけではないとの報告を受けております。しかし、SOS ボタンがきっかけで、子どもの気持ちを聞くチャンスができたと捉えております。</p>
川瀬委員長	<p>このボタンは、子どもが何かSOSを出すツールであり、学校としては受け取りのツールであります。前半の協議の中でも出ていたように、いかに発見していくかということが大事というか、必須だという感じがあります。</p> <p>夏休みの終了間際が一番よくないというのはよく言われますが、ご両親が仕事をしていると、子どもだけが家に残っていて、家で困った時にこのSOS ボタンで相談するのは重要かもしれないです。</p>
指導主事	<p>全てが同じパターンの対応でうまくいくわけではないです。中にはどうしても気が合わない子たちもいます。その場合、お互いどういう距離感を保つのがいいだろうと考えさせることもあります。現在は、謝罪の気持ちもないのに、とりあえず謝罪にさせるというよりも、やはりそれぞれが何か気持ちの掛け違いがあったのか、次に向かってどうすればいいのかと考えさせる機会を設けることの方が大切と思っています。</p> <p>低年齢の保育園とか幼稚園は、先ほどの説明のようにお互い謝っておきましょうみたいな感じの解決が見られるように思いますが、それは謝るといふことの社会性をまだ理解してくれないということであると思います。一方、中学校段階にいくほど自</p>

	<p>分の主張というものがあるし、自分のプライドもあるし、いろんな思いがあるので、そこが非常に難しくなっています。お互い「ごめんね。じゃあ、もう仲直りね。終わり。」という、そういうふうにはいかないです。</p> <p>自発的に自分が勘違いしたから謝りたいというのはそれはもちろん自分の視点であることだと思いますし、掛け違ったものがお互い分かったというのが一番理想的だと思います。そこを考えさせる時間は必要だと思います。</p>
川瀬委員長	<p>ケースによって、加害者のお子さんが今度は学校に行きにくくなってしまったり、非常に辛い状況になってしまったりするケースをたまに見聞きすることがあります。それもなかなか難しいと思います。</p>
安藤委員	<p>私もそういうケースを扱うことが多いんですけど、発達的な特性のために、例えば相手の気持ちが読みにくいとか、周りの流れとちょっとずれてしまうとか、ちょっと我慢した方がいいところでも衝動的に何か言ってしまうとか、どうしても特性のある行動が多くなってしまってお子さんがターゲットになっていきます。それによってもまた別のケアが必要になってくる場所もあると思いますが、そういう子たちのトラブルがいろいろと浮上してくる。顕著になってくるのは、小学校3年生くらいだと思います。周りの子たちがちょっと大人びてきて「みなまで言わなくても分かるよね」みたいな雰囲気グループができます。その雰囲気の中で、特徴のある子がクラスに何人かいると、本当にコブラ対マングースみたいな感じで同じゲージに入っちゃダメみたいな現象が起きます。しょっちゅうトラブルっていうケースの私の患者さんに言うのですが、学校は学期の途中からは別のクラスにできないので、どうやって先生方は対応されているのでしょうか。</p>
教育長	<p>安藤先生が言うように、やはり途中でのクラス替えは、なかなかできないです。基本的にはそこに大人の目というか、いわゆる補助員等を入れたりしてその場は対応します。</p> <p>そして、次の学年等でクラスの編制を考えたり、さらに必要であればその子に再度補助員をつけていったりします。こういうような形で今までは対応しています。でも、その数名のために全体が何ともならないような状態になってくるのは、本当に学校現場もよく理解しています。しかし、こればかりはなかなか通常</p>

	<p>の授業中でもなかなかうまくいかなくなってしまうということがあって、以前はベテラン教員の技でカバーしたり、退職された教員を補助に入れたりしたケースもありました。それで、本当に何とかその学年だけは維持できた状況になりましたけど、本当に大変です。</p>
川瀬委員長	<p>本当にそういう状態で先生がやっていらして大変だと感じます。15年くらい前までは、クラスの中で特徴のある子のことをよく理解し、周りの子も成長してくれるという姿があったと思います。しかし、現在は、非常にクラスをまとめていくということが大変で、先ほどのいじめのデリケートな話にまでなかなか目がいく余裕が先生方になのが現実かなって思います。</p> <p>今大学院生たちを小学校にお邪魔させていただいているんですけど、落ち着いているクラスもあれば、なかなか大変で、先生が苦勞されているクラスもあります。いろいろな特性のある子が絡むと、やっぱり大変です。どこへ落ち着かせればいいのか。そういう意味でもSOSボタンみたいなものをフル活用して表面的には声を出せない人たちの声を吸い上げるっていうのは非常にいい企画であると思います。</p>
安藤委員	<p>私の外来に来ているお子さんについて、学校の先生が来てくれて学校の先生と作戦会議をすることがよくあります。1週間に1件、2件はありますが、先生たちも本当にこの子だけじゃないんですって言うのです。そういう状況を聞くと、その他の子たちの心のいろいろな悩みをどうやって吸い上げるのかなってというのが、いつも常に心配していたことでした。こういうメディアを使うというのがよいことだとも思います。</p>
川瀬委員長	<p>そうですね。使えるツールを使って、これはいじめなのか、いじめじゃないのかっていう議論になっちゃうと、それは多分、本人たちはちょっと置いていかれちゃって大人の側の議論になってきます。そうではなくて、「話を聞いてよ」と自分にちょっと関心を向けてっていうようなことの方が、まず一番ベースになるのかなっていうところもあります。</p> <p>それは加害者と言われる子も被害者と言われる子もそうなのかなと思います。家庭もいろいろな形があるのでそこもなかなか難しいです。尾張旭市はその辺は落ち着いているところが多いのかなとなんとなく勝手に思ったりもします。そうではない地域に行くと尾張旭市ってすごく先生方のおかげはあるのか</p>

	<p>もしれません。これは楽なという意味ではないんですけど、落ち着いた感じのところが多いかなと思います。</p> <p>今年度この会議でご意見をもとに事務局の方で、それを実際の政策へ反映していただくのはしていただき、どこかのタイミングで教えていただくことができますか。</p>
教育長	<p>今までこちらで一方向的にその対応をしながら、翌年度にこんなふうにしてますよというお話をしていましたが、やはりご意見をお聞きして早期に対応していくべきことも多いと思いますので、こんなことを進めていきますということを皆さんの方に何らかの形でお知らせをさせていただきます。また、翌年度には、経緯を説明していきたいと思います。</p>
安藤委員	<p>さっきの話の流れですけど、尾張旭は本当に先生のスキルが高い方が多くて、いろいろな違う医療系の方もいらっしゃるんですけど、学校にどう話を持っていったらいいのか、本当に困るケースが多いんですが、尾張旭は発達センターもあるし、勉強がしっかりしているせいもあって先生との関係性がすごく良いと思います。もう学校に任せれば大丈夫。いつか言える日が来ると思います。</p>
星原委員	<p>いつもこの会に出ると、先生方、本当に大変な苦勞をされていらっしゃるというのがよく分かります。先ほど言いましたけど、いじめは子どもだけじゃなくて大人の世界も全く一緒なので、自分の身にふりかかった経験などを踏まえて、地域の方々も情報発信がすごく大事だと思います。</p>
長谷川委員	<p>今日は初めて参加しました。このいじめアンケートの数値も多いことから、子どもに関してはすごく生きづらい世の中なのかなと思います。我々大人が何かできることがあれば、それは是非行っていきますので、今後ともぜひよろしくお願いいたします。</p>
川瀬委員長	<p>私は前もお話したことがあるんですけど、不登校になった子や、学校に行かなくなることで自分を守ったねということがよく時々あって、そのまま生き続けたら本当に自殺に至ることもあったのかなというケースがありました。</p> <p>子たちが勇気を出して不登校になっている場合もあるので、そこらへんは解決の方向を、またいろいろな目でいろんな基準で見えていけるといいのかなと感じました。</p>

	<p>本当に子どもたちの声を拾っていく、気づいていくというところからスタートです。そこはSOS ボタンの中で少し支援していただくんですけど、そこを共通理解として取り組んでいけるといいかなと思いました。ちょっと予定より早いのですが終わります。</p>
指導主事	<p>今後の予定についてです。</p> <p>平成26年度に、尾張旭市いじめ問題専門委員会を設置し、それ以降毎年委員会を開催しております。本専門委員会は、いじめにより重大事態が発生した際には、調査委員会として、当該いじめ問題にかかる調査を実施していただく場合がありますが、ない場合には、基本的には年1回の開催となっております。来年度の開催時期については、今年度と同様に5月から8月の時期に開催したいと考えておりますので、よろしく申し上げます。</p> <p>それでは、これをもちまして、令和5年度第1回尾張旭市いじめ問題専門委員会を終了します。</p> <p>ありがとうございました。</p>